

---

# 黄花一輪

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

黄花一輪

### 【Nコード】

N6024B

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

人を殺し身を隠していた轟政。しかし彼の腕前を知った者により決死の仕事を依頼される。断っていた彼も母の死を受けて遂にその仕事に向かう。彼が意識していた花とは。司馬遷の史記刺客列伝のお話です。男の生き様です。

## 第一章

黄花一輪

昔と感じるならそれこそ気の遠くなるような昔であり近いと思えばつい昨日のことであるうか。少なくとも想えばそれはすぐ側にあることである。

中国はかつて多くの国に別れていた。その中に魏という国があった。

彼はその国の生まれであった。名を聶政という。彼は背が高く長い腕と立派な身体を持ち、精悍な顔をしていた。生まれは決して卑しいものではなかったが父を早くに亡くし、生活は貧しかった。

彼には母と姉がおり二人の為に軍に入って生活を支えていた。長い腕と立派な身体を持つ彼は剣技に長け忽ちのうちに魏でも名を知られる剣の使い手になった。

だが。彼の貧しさをからかう者が同僚にいた。

「今何と言った」

酒場のことであった。仲間内で飲んでいる時に彼は向かいに座る同僚を見据えた。

「言ってみろ、何と言った」

「聞こえなかったのか」

その同僚は馬鹿にした目で彼を見返してきた。

「御前はまるで犬だと言ったのさ」

「何故私が犬なのだ」

彼は杯を置いて同僚を睨みつけてきた。犬と呼ばれたことに憤りを覚えたのは言うまでもない。

「言ってみろ。ことと次第によつては」

「じゃあ言つてやるぞ」

酔った弾みか。同僚は退くこともなく周りの仲間達の制止も振り切つて述べた。

「御前は母と姉の為に働いているのだな」

「それがどうした」

聶政は言い返す。

「それだ。何の役にも立たない無駄飯ばかり食う女二人の為にあくせく働いている。これが犬でなくては何なのだ」

「母上も姉上も無駄飯食いなどではない」

自分のことを言われるよりも腹が立つた。彼にとってはかけがえない肉親であり幼い頃から育ててくれた有り難い存在であるからだ。

「それをその様に言うか。謝れ」

「犬に謝ることはない」

しかし同僚は彼を馬鹿にした顔で見るだけであった。

「まだ言うのか。では母上と姉上にもか」

「犬の親も姉も犬だ」

彼は言った。

「他の何だというのだ？」

「ぬうう」

「おい聶政」

「落ち着け」

同僚達は彼の間に入って制止しようとする。

「こいつは酔っているんだよ」

「だからな」

「そうか」

聶政は彼等の言葉を聞いて落ち着きを取り戻した。だが男はさらに言った。

「犬でないというのなら証拠を見せろ」

聶政を挑発してこう言ってきた。

「見せられないのなら御前も御前の家族も犬だ」

「では見せてやる」

もう我慢ならなかった。眦を決して立ち上がった。

「それがこれだっ」

そう言つと腰の剣を抜いた。そのまま流れる動作で男の胸を刺し貫いた。それで終わりであつた。

「犬は剣を使いはせぬ。わかつたか」

血の中に横たわる男を見下ろして言つた。彼は家族の為に剣を抜いたのであつた。

だが。それにより。彼は故郷を失うことになつた。すぐに酒屋を後にするとその足で母と姉、そして金を持って国を後にした。

彼は魏を去ると東の斉の国へ家族を連れて入つた。そこで牛や豚の屠殺業をやつて生計を立てることとなつたのであつた。同時にそれで母と姉を養い、また自身を仇と狙う者達を避けたのであつた。

この頃魏の側にある韓において政争が起こつていた。この時韓において権勢を持つていたのは宰相の俠累であつた。その彼と争つていたのが衛の濮陽にいる嚴仲子であつたのだ。

この嚴仲子という人物は剛毅な人物であり齒に衣着せることがなかつた。それは俠累にも及び政策や過ちに対してもずけずけとものを言つた。これがもとで彼と激しく対立することになつたのだ。

両者は激しく争つたが結局は宰相である俠累の権勢が勝つた。嚴仲子は朝廷において彼を強く批判し、激昂のあまり剣さえ抜いたがこれは他の貴族達に止められた。だがこのことにより彼は韓にはいられなくなつた。そして国を出て諸国を流離うこととなつたのであつた。

「こうなれば」

彼は復讐を誓つた。それを誓いながら諸国を渡り歩いた。そして斉に辿り着いた。

ここで彼はある人物の噂を耳にしたのであつた。

「聶政!？」

「そうです」

斉にいる知り合いの貴族田縦に迎えられ彼の屋敷で互いに杯を重ねている時にこの名を聞いたのであつた。

「腕の立つ男でして。今はこの国の都で牛や豚を殺して生計を立てております」

「牛や豚を!？」

「ええ。元は魏にいたのですが」

「はい」

田縦は杯の中の酒を飲み、干し肉を指でつまみながら話を続ける。聶政もまた同じ様にしていた。まだ明るい時間の筈なのに何故か周りが暗くなったように感じられた。

「いざこざで人を殺しまして。それでここまで逃れてきたのです」

「そうだったのですか」

「体格もよく、並々ならぬ腕の持ち主です」

「どうしてそれを知ったのでしょうか」

嚴仲子は彼に問うた。

「その様なことを」

「刃の使い方を見ればわかります」

それが彼の答えであった。

「ある程度のことは。私も剣の心得はありますから」

「そうなのですか」

「おそらくあれだけの使い手はそうはおりませんまい」

そのうえでこう述べてきた。

「素晴らしい剣客です」

「剣客」

その言葉が心に響いた。俠累への報復を諦めていない彼にとって、はまさに奇貨の様に思われたのであった。

彼はまた田縦に問うた。

「その方はこの国の都におられるのですよね」

「ええ、確かに」

彼は答えた。

「何なら紹介致しましょうか」

「お願いします」

嚴仲子は頭を下げて頼み込んだ。

「是非共」

「わかりました。それでは」

彼はそれを受けてくれた。

「すぐに参りましょう。宜しいですね」

「はい」

こうして彼は轟政の家に向かった。そこにはみずぼらしい家とその前で犬を殺している粗末な身なりの男がいた。

## 第二章

田縦はその粗末な身なりの男を指し示して巖仲子に紹介した。

「聶政殿です」

「むうっ」

巖仲子はまずは彼の腕を見た。長く、そしてたくましい腕であった。それを見ると如何にも剣を巧みに使えそうであった。

屈んでいるその身体は豹の様である。顔も精悍で確かに犬や豚を殺しているような男には見えはしない。まさしく剣客といった趣の男であった。彼にもそれはわかった。

「聶政殿」

田縦は聶政に声をかけた。

「おや、貴方でしたか」

聶政は声を聞いて顔をあげてきた。その目の光も実に強く鋭いものであった。

「今日は何の御用件で」

「実は貴方に御会いしたいという方がおられました」

田縦は述べた。聶政はそれを聞いて怪訝な顔をした。

「私なぞに一体どなたが」

「こちらの方です」

「はじめまして」

巖仲子は聶政に挨拶をした。これが二人の出会いはじまりであった。

巖仲子はすぐに彼が只ならぬ剣技の持ち主だとわかった。そのうえで見定めたのだ。

「彼しかいない」

と。そのうえで彼との交遊をはじめた。

最初は二人だけの交遊であった。だが次第にそれは縁者にも及び遂には聶政の年老いた母にまで杯を献じ、大金を差し出す程にまで

なつた。あまりものことに聶政は驚きを隠せなかつた。それですぐに嚴仲子のところに向かつて尋ねた。二人は嚴仲子の部屋で向かい合つて話をはじめた。窓一つない部屋で蠟燭の灯りだけを頼りに話をしていた。暗い光の中に二人の姿だけが浮かび上がっている。

「これは一体どういうことでありましようか」

「何、お付き合いですから」

嚴仲子はにこりと笑つてそう述べた。

「当然ではないでしょうか」

「いえ、私にはそうは思えません」

聶政は怪訝な顔をしてそう述べた。

「杯だけでなく大金まで母に送るとは。只事ではありません」

「それはないですが」

「いえ、それでもです」

彼は言う。

「これ程のものは受け取るわけにはいきません」

「まあそう仰らずに」

「それでもです」

彼は勧められても拒んだ。

「私は異郷でこうして貧しい生活を送つてはいますが年老いた母を充分に養つております。姉は嫁ぎ、今は母子二人で静かに暮らしており不自由はしておりません。ですからそれ程のものを受け取ることもないのです」

「受け取つて頂けないのですか？」

「はい」

そしてきつぱりと言つた。

「ですから。お下げ下さい」

「わかりました。それでは」

ここまで言われては仕方がない。嚴仲子は引き下がることにした。聶政はそれを見たとうえであらためて彼に尋ねた。

「ところで」

「はい」

顔を上げて見合わせる。今二人の目線が合った。

「何かあるのでしょうか」

「何かとは」

「貴方のことはお聞きしております」

聶政は言った。

「衛の方で韓において宰相殿と仲違いされておられることは」

「御存知でしたか」

「憚りながら市井の噂で」

彼は答えた。

「聞いております。若しや」

「そこまでわかっておられるのなら隠すのは失礼にあたりますな」

この失礼という言葉に聶政は密かに感じるものがあつた。だがそれは今は口には出さず嚴仲子を見ていた。

「それではお話ししましょう」

嚴仲子は静かに己のことを述べはじめた。

「その通りです。私はあの男と争っております」

「やはり」

「それが為にあの男とは互いに命を狙い合う仲。それで貴殿に御会  
いしたのですが。そういうことでしたら」

「お待ち下さい」

聶政は立ち上がり去ろうとする嚴仲子を呼び止めた。

「どうしても為されたいのですね」

「無論」

嚴仲子は答えた。

「その為に今こうして生き恥を晒しているのですから」

「わかりました」

「そこまで聞いたうえで頷いた。それから述べた。

「では時が来るまでお待ち下さい」

「時が」

「はい、その時が来ましたら」

聶政は言う。

「私も思うところがありますので」

「左様ですか」

「はい」

言葉は少なかったが確かな話であった。それだけで充分であった。

「お話ししましょう」

「わかりました。それでは」

「はい」

話は終わった。聶政が立ち上がった。

「これで」

「いや、お待ち下さい」

ここで巖仲子は聶政を呼び止めた。

「何か」

「折角お会いしたのです。今日は」

「ですが今は」

「いえ、それとは別です」

彼は述べた。

「今は客人として」

「客としてですか」

「はい、宴を催したいのですが」

聶政を見てこう述べた。

「如何でしょうか」

「宜しいのですか？」

聶政はそれを聞いて彼に尋ねた。

「私の様なしがな市井の豚殺しに対して」

「何、そんなことは関係ありません」

だが聶政はそう述べた。

「お会いしたことそのものは縁あつてのことです」

彼は言う。

「その縁に感謝したいのです。それでは駄目でしょうか」  
「そういうことでしたら」

無下に断るのもどうかと思った。それでまた席に着いた。

「宜しく願います」

「お聞き頂き感謝します」

「では酒ですな」

「はい、それと馳走と」

こうして彼は聶政を客、しかも賓客としてもてなしたのであった。宴が終わり聶政が家に帰る時である。土産に何かを手渡そうとした時である。

「さて、何がよいか」

「若し宜しければ」

聶政はここではじめて申し出た。

「はい」

「そこにある花を頂けるでしょうか」

「花を!？」

「はい」

見れば部屋の端に一厘の花が添えられていた。それは黄色い菊の花であった。

「あの花を頂きとうございます」

「しかしあの様な花なぞ」

土産にもなりはしない、嚴仲子はそう言って断ろうとした。しかし。

「いえ、あの花こそが欲しいのです」

聶政はそう言って引き下がろうとしない。存外引かない様子であった。

「他のものはいりませぬ故」

「本当にあれだけでよいのですね?」

「ええ」

やはり言葉は変わらなかった。

「宜しいでしょうか」

「わかりました、そこまで仰るのなら」

嚴仲子は頷いた。ここは客人としての彼の心を汲み取るうとしたのだ。

「どうかこれを」

「申し訳ありませぬ」

「いえいえ。しかし菊がお好きなのですか」

「ええ、黄色い菊が」

轟政はそれに答える。

「花では一番好きです。母上と姉上によく頂いたものですし」

「そうだったのですか」

「子供の頃ですがね。今では懐かしい話です」

そう語る顔が優しげになった。とても剣客のものとは思えない。

「その頃を思い出すのですよ」

「そうだったのですか。ではお受け取り下さい」

「はい」

轟政は菊を受け取った。そして屋敷を後にした。嚴仲子はそれを最後まで見送るのであった。最後の最後まで礼を忘れてはいなかった。

### 第三章

それから暫くして衛が落ち着き巖仲子は国へ歸つた。だが侠壘への恨みは変わらず機会を伺い続けていた。そうしている間に時がさららに過ぎ遂に聶政の母が死の床についたのであった。

「政や」

母は死の床で看取る我が子に声をかけてきた。

「今まで済まなかつたね」

「母上、何を言われます」

聶政はそんな母に声をかける。

「ほんの些細な病です。少し休まれば」

「いや、もうわかるんだよ」

母は優しい声でこう語つた。

「私にはね。もう長くはないね」

「それは……」

「いいんだよ、隠さなくても」

自分でわかっていることだから。もうよかつたのだ。

「それでね」

「はい」

そのうえで話をはじめた。

「今まで有り難うね」

まずは我が子に礼を述べた。

「世話をしてくれて。こんな私に」

「いえ、それは」

聶政はそんな母に対して言う。

「母上ですから。幼い頃よく菊を私に下さつた母上ですから」

「菊かい」

「はい」

聶政は答えた。

「それだけではありませんが。菊の御恩です」

「御前は菊が好きだったからね」

母はそれを聞くと天井を見た。見ながら遠い目をした。

「野原でちよつと摘んだだけのものだったけれど」

「それで充分なのです」

聶政は言う。

「私にとっては。菊であるだけで」

「いつも一輪だけの菊」

母はまた言った。

「それで充分だったのかい」

「充分過ぎる程でした。母上と姉上が下さったものですから」

「その菊の御礼が今までかい」

「そう取って頂けるのなら」

「御前は。本当にいい子だったよ」

声に懐かしさが籠もる。

「いつもね。私の為にしてくれて。だから」

「だから？」

「今度は。自分の為に何かをおし」

我が子を見てこう言った。

「いいね、自分の為に」

「母上……」

「今までは私の為にしてくれたんだから」

「かたじけのうございます」

その目から涙が零れた。そして膝の上に落ちていく。硬く握り締

めた拳にもそれは落ちた。

「謝るのは私の方だよ」

母はうつすらと笑ってまた言った。

「御前みたいな剣の腕があれば世に出られたのに。私のせいで。だから」

最後にこう言い残した。

「私が死んだ後はね。好きなようにおし」

「はい………」

聶政は泣きながら頷いた。そのまま母の最期を看取った。母の葬儀を終え喪服を脱ぎ終わった時。聶政はもう迷うことはなかった。

すぐに店を閉まった。その時田縦が家にやって来た。

「魏に帰られるのですか？」

「いえ」

その言葉には首を横に振った。

「魏にはもう。私の家はありませんから」

「ではどちらへ」

「義にです」

「義!？」

田縦はその義という言葉に首を傾げさせた。

「魏は魏でも義、ですか」

「そうですね、私はそちらに向かいます」

にこりと笑ってそう述べた。

「もう一人です」

「何はともあれ齊を去られるのですね」

「はい」

返事にも淀みがない。

「今までお世話になりましたが。これで」

「そうですね、寂しくなりますね」

田縦は聶政の言葉を聞いて残念そうに言葉を出した。

「またお会いできればいいのですが」

「残念ですがそれは約束出来ません」

聶政は顔をあげてこう言った。

「申し訳ありません」

「………聶政殿」

田縦はそこに何かを感じた。そして彼に言った。

「志をお持ちなのですね」

「それが義です」

彼は言う。

「この花の義です」

「菊ですか」

彼もその黄色い菊を今見た。

「小さな、それでいて綺麗な菊ですね」

「私はこれさえあればいいのです」

静かにそう述べた。

「黄花が一輪あれば。それで充分です」

「ではその花と共に行かれるのですね」

「もうここに返って来ることもありませんが」

「では最後に宜しいでしょうか」

聶政の気持ちを汲み取った。田縦は引き留めはしなかった。だが

そのかわりに。

「別れの盃を」

「宜しいのですか」

「いえ、こちらこそお願いした程です」

彼は言う。

「是非共」

「私の様な追われる者に」

「追われていようと義士は義士です」

そしてこうも言った。

「その義士をもてなすことはまたとない名誉です。ですから」

「わかりました。では」

聶政は盃を受けることにした。そして二人で最後の別れの酒を楽

しむのであった。

別れの宴が終わると聶政は斉を後にした。田縦はその後姿を何時

までも見送った。その姿が完全に見えなくなるまで。何時までも何

時までも。

## 第四章

聶政が向かうのは濮陽であつた。そこに辿り着くとまず嚴仲子のところにやつて来た。嚴仲子は彼を見るなり険しい顔で問うてきた。「決められたのですね」

「はい」

聶政はそれに頷く。

「その為に参りました」

「わかりました、ではこちらへ」

嚴仲子は彼を自分の屋敷の奥へと招き入れた。屋敷の中はかなり広く彼の家の権勢を思わせる。だが装飾等は意外と質素である。どうやら生活そのものは清廉であるらしい。

奥へ奥へと進むと庵に着いた。その中へ入った。

「こちらで宜しいですか」

「はい」

聶政は応える。彼としては断る理由がなかった。

「わかりました。それでは」

二人は向かい合つて座つた。そこで話をはじめた。

「まずはお話を窺いましょう」

「母が亡くなりました」

聶政はまずは自身の母の死について述べた。

「それでこちらまで参りました」

「左様ですか。御母堂のことは」

「いえ、それは」

まずはそれに謙遜する。

「お構いなく。母は天寿を真つ当しましたから」

「左様ですか」

「最後に私に言ったのです」

「何と」

「自分が死んだら私の好きなようにするといいと。それで私も気が楽になりました」

「そうだったのですか」

巖仲子はそれを聞き瞑目した。

「立派な方だったのですな」

「はい、こう言つては自慢になりますますが素晴らしい母でした」

聶政もそう述べた。

「その母の葬儀も終わり私は一人になりました。それで」

「こちらに参られた」

「私はほんのしがない男です」

聶政は言う。

「祖国で人を殺し、そして異国で豚殺しをしていた。名も知られていないそんな男です」

「ですが貴方は」

「いえ、それは事実です。ですがそんな私に貴方は礼を尽くされた。あの花を下さりそして母を褒めて下さった。私の様な者に対して」

「貴方をお願いすることは死を賭したものです」

「命は。生きているからこそではありません」

聶政のその言葉には何の淀みもなかった。何処までも清いものであった。

「どの様に生きたかです。違つてしょうか」

「それでは貴方は」

「はい、義と礼に生きます」

清い声のまま言う。

「最後までそれに拠つて生きるだけです」

「そうなのですか」

「ですから」

声が強くしつかりとしたものになった。

「貴方の申し出、喜んで引き受けましょう」

「かたじけない、まさか引き受けて下さるとは」

「俠累殿は韓におられるのですね」

「はい、韓王の末の叔父でその権勢は比類なきものです」  
「やはり」

それは言うまでもないことであつた。

「周りは屈強な兵士達が固め相当なものです。ことを果たすのは容易ではありません」

「それでは今までは」

「はい、残念なことに」

嚴仲子は首を横に振つた。

「成し遂げた者はおりません」

「左様ですか」

「だからこそ貴方をお願いしたいのです」

そして顔を上げて聶政の目を見た。

「人も出しますので」

「いえ」

だが聶政はその言葉に首を横に振つた。

「それはかえつてまずいでしょう」

「といたしますと」

「相手は王族であり一国の宰相であります」

「はい」

「それだけに警護が厳重ならば人が多いとかえつて目立ちます」

「ですが」

「お聞き下さい」

聶政は続ける。

「目立てば終わりなのです」

それは彼が最もよくわかっていることであつた。

「警戒されれば暗殺は意味がありません。ましてや人が捕らわれればそれで秘密が漏れます。さすれば韓は国をあげて貴方を滅ぼさんとするでしょう」

「それはわかつております」

「それでは尚更です。人は多くてはいけません」  
彼は言い切った。

「一人でなくては。ですから私が」

「行かれるのですか？」

「はい」

きつとして言い切った。

「その為にも一人で参りました。私に声をかけて下さったのならば是非」

「……」

嚴仲子は暫し何も言えなかつた。だがようやく口を開いた。

「わかりました」

無理を承知で声をかけたのだ。ここは彼を信じることにした。

「それではお願いします」

「はい」

聶政は頷く。

「必ずや貴方の期待に添えましょう」

「ではまず宴を」

「宜しいですね」

「はい、私からのせめてもの気持ちです」

彼もまた人の心を知る者であった。だから聶政の為に宴を開きたいと思つたのだ。

「どうかお受け下さい」

「かつては私を客として扱って頂き、今もまた」

「貴方はそれだけの価値がある方です。御母堂への孝行もまた」

「かたじけのうございます。それでは」

「はい」

「最後に」

二人は最後の盃を交え合った。それが終わると聶政は衛を去つた。衛を去る時は嚴仲子一人が見送つた。彼に別れを告げると。二度と振り向くことなく韓へと入るのであった。己が仕事を果たす為に。

黄花一輪

## 第五章

韓に着いた。都に入り狭累の屋敷まで行く。そこはもう屋敷と言  
えるものではなかった。

「これは」

聶政はその屋敷のあまりもの豪華さ、大きさに息を呑んだ。周り  
には物々しく武装した兵士達が大勢取り囲んでおりまるで城の様で  
ある。だが彼は臆してはいなかった。空は暗い雲に覆われようとし  
ている。その下で今一步前に出た。

「こちら」

その彼に門を護る兵士の一人が声をかけてきた。

「一体何の用だ？用がないのなら去れ」

「一つお伺いしたいことがあります」

彼は逆にその兵士に尋ねた。

「何だ？」

「宰相様はこちらにおられるのでしょうか」

「？そつだが」

彼は素つ気無く答えた。別にこの答えには何もおかしいところは  
なかったがそれがかえってことを起こしてしまうことになる。彼は  
聶政が何の為にここに来たのかを知らないのだ。 4

「陳情なら今は時間ではないぞ」

兵士は彼に言う。

「それは明日にしる、よいな」

「陳情ではありません」

彼は言った。

「そつではないのです」

「では何だ？食客か？」

「いえ」

そつでもないと言った。

「それとはまた」

「では何だ。その身なりからはどちらかとしか考えられん。冷やかに来たのならさっさと帰れ」

「それでもないのです」

「わからん奴だな」

「いい加減苛立ちを覚えてきた。」

「では一体何なのだ」

「それは」

「それは？」

空気が張り詰める。しかしそれは聶政だけが感じていることでありこの兵士は感じていなかった。

「これでございます！」

「……」

腰に持つ剣を一閃させた。それで兵士の喉を切り裂いた。

一瞬のことであつた。兵士は首の半分を断ち切られた。言葉を発する間もなくその場にどう、と倒れ込んだ。

「済まぬな。そなたには怨みはないが」

聶政はうつ伏せに倒れた兵士の亡き骸を見下ろしてこう言った。

「だが今の私は。やらなければならんだ」

「何だあいつは！」

「一人斬っているぞ！気をつけろ！」

屋敷の方から兵士達がやって来る。もう後には引けなかった。

「狭累殿！」

彼は門で大声でその名を呼んだ。

「お命頂戴する！覚悟！」

そして駆け出した。その手に剣を持ち。一直線に屋敷へと向かっていく。

そこに兵士達が群がる。だが聶政は剣を縦に横に振り回し彼等を斬り伏せていく。そして恐るべき速さで屋敷に向かっていくのであつた。

兵士達では抑えられない。聶政は彼等を突破して遂に屋敷の前に来た。そこには大きな鉄の扉があった。

これならばどうあつても無理だ、普通ならばそうであつた。しかし聶政は。その剣を門の扉の合わせ目に真一文字に一閃させたのであつた。

「なっ！」

彼を必死に追う兵士達はそれを見て啞然とした。気合一閃で扉を斬り開いたのである。彼の前に門がゆっくりと開いたのであつた。

「何という男だ」

「剣で鉄の扉を開くとは」

兵士達は何と言つていいのかわからない。聶政はそんな彼等を振り向くことなく屋敷の中へと入つて行く。そして。その中でも襲い来る兵士達を斬り捨て中へ中へと進んで行く。中のことは知らない筈なのに彼はまるで全てを知っているかの様に屋敷の中を進んでいた。

奥へと入る。そこには。俠累がいた。

## 第六章

大柄で鋭い目をした男であった。礼服を着て腰には剣を帯びていた。

「俠累殿か」

聶政は問う。

「そつだと言つたら？」

俠累はその鋭い目を聶政に向けてそれに答えた。

「お命頂戴仕る」

それが聶政の返事であつた。剣を構え直して身構えてきた。

「今この場で」

「ここまで来たことはまず褒めてやろう」

俠累は威圧する声でこう述べた。伊達に一国の宰相をやっているわけではない。恐るべき威厳がそこにあつた。

「だが。ただやられるわけにはいかぬ」

その腰にある剣を抜いてきた。鋭い銀色の光が瞬く。

「流石は一国の相。お見事です」

聶政もその立派な立ち居振る舞いに賞賛を隠さなかつた。

「ですが。これも義故。参ります」

「名を聞こうか」

俠累は聶政の顔を見て問うてきた。

「見たところ身なりはともかく決して卑しい顔ではない。さぞ名のある者と見たが」

「名はありません」

だが聶政はそれには答えはしない。

「刺客に名がいらしましょうか」

「そついうことか。ならばよい」

俠累もそれ以上問おうとはしなかつた。そして。周りの者達に顔を向けた。そのうえで言った。

「手出しは無用ぞ」

「なっ」

「公よ、それでは」

「よい。これだけの者をよつてたかつて殺したとあつてはこの俠累の名折れ」

彼は言った。

「わかつたな」

「はい」

「それでは」

「これでよいな」

「かたじけのうございます」

聶政は俠累を見据えながら口だけで礼を述べた。

「さすれば」

「参るがよい」

両者は構えを取った。

「ならば」

先に動いたのは聶政であつた。まるで疾風のようにその場から姿を消した。

「むっ」

俠累は彼の姿を見失ってしまった。その瞬間右から殺気を悟った。

「そこかっ」

慌てて身体を捻る。それで聶政の一撃目をかわした。

すかさず二撃目が来る。それは剣で受け止めた。

速いだけではなかつた。その威力も俠累が今まで受けたことのないものであつた。剣を通して衝撃が腕にまで伝わってくる。

それで腕の感覚が鈍つた。だが彼も命をやるつもりはなかつた。

聶政に向けて剣を繰り出す。

素早い突きを出したつもりだつた。しかしそれは聶政によってあえなくかわされてしまった。二撃目も三撃目も。聶政の動きは速く影を切るようなものであつた。

暫く攻撃を出したが聶政の影を切るだけであつた。これに疲れが見えたところで間合いを開こうと後ろに跳ぶ。

その時だった。聶政も動いた。そして後ろに跳んでいる俠累を追い剣を斜めに一闪させた。

左肩から右の脇にかけて血が噴き出る。それで全ては決した。

「ぐぬっ」

「これで終わりましたな」

傷は深いものだった。血が止まりはしない。致命傷であるのは誰の目にも明らかであつた。

「俠累殿、お命頂戴致しました」

「見事だ」

俠累は片膝をついてこう述べた。口からも血を出しているが意識は健在であつた。

「これだけの腕を持つ男が天下にいようとはな」

「お褒め頂き有り難うございます」

「わしもまた。剣には自信があつたが御主程ではなかつた」

まだ片膝をついている。だがその顔からは血の気がさらになくなっていく。

「それに出会え、剣を交えたことを最期の誇りにしようぞ」

そこまで言い終えると崩れ落ちた。そしてそのまま息絶えたのであつた。

「公よ……」

周りの者達は最初は主の死を呆然と見ているだけであつた。だがすぐに聶政に顔を向けてきた。

「よくぞここまで成し得たと褒めるべきか」

「だが」

「待て」

ジリジリと迫ろうとする彼等を手で制止する。

「もう私にはやることはない」

「どついうことだ!？」

「やることが終わったということだ」

聶政は言う。

「最早な。だから」

すつとその場を去ろうとする。

「逃げるのか？」

「違う」

呼び止めた兵士の一人にそう返す。

「逃げはしない。ただ」

「ただ？」

「部屋の中では迷惑になるからな。今更だと思つが」

そして部屋を出た。そのまま庭に出る。

「ここならよいな」

「それで何をするつもりだ」

「最期を決める」

聶政の声はこれまでより強いものになっていた。

「最期を！？」

「そうだ。こうしてな」

持っている剣を掲げた。そして。

「言っておく。私には名はない」

まずはこう言った。

「そして何者かは。教えるつもりもない。だから」

「なっ！」

次の瞬間彼等は信じられないものを見た。

聶政は自分の顔に剣をやった。そしてその皮を剥ぎだしたのだ。

「ば、馬鹿な……」

「そこまでして……」

空の暗雲がさらに深くなり雷の音まで聴こえてきた。彼はその中で自分の皮を剥いでいったのである。

「これで顔はなくなった」

顔の皮を床に捨てて言った。そこには血に塗れた赤いものがある

だけであつた。

「そして次は」

「ぬうつ！」

「またしてもか……！」

剣でその目をくりぬいていく。右も、左も。遂にはそこには空洞があるだけであつた。

最期には膝をつき。そこに剣を入れる。

「これで私が誰か。わかる者はおるまい」

「……」

あまりにも壮絶、そして凄惨であつた。誰も何も言うことが出来なくなつていた。

「私は何者でもない。そして今あるべきところに還る。それだけだ」  
腹を切り己が腸を引きずり出した。それで最期を迎えたのであつた。これまでにない凄惨な最期を遂げて。

雷が落ち雨が降り注いでいく。聶政はその中で息絶えたのであつた。義を果たして。

## 第七章

その凄惨な最期は忽ちのうちに韓の間で話題になった。韓は彼の屍を市に置き何者か探すことにした。知っている者には大金を約束した。だが誰にもわかりはしなかった。

だがある日。そこに一人の女がやって来た。

「御前は？」

「間違いない」

その胸にある一輪の花を見て言った。それは黄色い菊であった。

「この菊が。何よりの証」

女は言う。

「政よ」

聶政の亡骸を見て言った。

「こんな姿になって。それでも御前は義を果たしたのね」

「待て」

周りにいる者達が女を呼び止めた。女は仰向けに寝かされている聶政の亡骸の上に崩れ落ちていた。顔も眼もなく、腸も出された亡骸の上に倒れ伏し、寄り添っていたのだ。

「御前はこの者を知っているのか？」

「はい」

女はそれに答えた。

「私は。姉です」

「何と」

思いもよらぬ言葉であった。

「この男の。姉だったのです」

「では何故」

韓の人々は彼女に対して言う。

「ここに来たのだ。今この国ではこの者の素性に千金をかけている」  
「宰相殿を殺した男だ。その縁者となれば貴女も只では済まないぞ」

そういう時代であった。だが彼女はそれを知っていた。

「知っています」

「なら何故」

「弟が何をしたのかを。弟は私が嫁ぎ、母が死ぬまで身を慎んでいました。事を起こし、それによつて私達に害が及ぶのを避ける為に」

「それがわかつていながらまた」

「わからん。もう逃れることは出来ないぞ」

「元より逃れるつもりはありません」

姉の言葉は硬いものであった。意を決した声であった。

「何故なら私は」

懐から小刀を出してきた。

「若し弟であつたならばここで死ぬつもりだったからです。そして今」

「今!?まさか」

「そのまさかです。政!」

弟の名を呼んだ。

「聶政! 貴方のことは私が伝えます! それが私の貴方に対する義!」

「聶政!?まさか」

彼のことを知る者がそこにいた。

「魏の国の剣の使い手の。そうか、彼だったのか」

「御存知の方がおられましたのね。それならばいいです」

そうした者がいることを見てにこりと笑った。そして。

「貴方への最後の贈り物」

聶政の亡骸の上にそつと花を一輪置いた。それはやはり黄色の菊であつた。

「これでもう思い残すことは」

自分の喉に小刀を刺した。それでゆっくりと事切れ、弟の横に倒れ伏した。

こうして聶政が誰であるのかは後世に残り多くの者が知ることに

なった。彼は義の為に生き、そして死んでいった。常に愛していた黄色の菊は今でも咲いている。彼がその花を愛したことは多くの者が忘れ去っていても。今も人々の前に静かに咲いているのである。

黄花一輪 完

2006・9・23

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6024b/>

---

黄花一輪

2009年6月29日19時12分発行